

故 山村 彰さんを偲ぶ

去る11月3日、日本におけるレーザーの父、山村 彰さんが亡くなりました。心からご冥福を祈りつつ、少し山村さんのことを紹介して偲ぶ言葉とします。

山村さんは山村硝子株式会社の役員としてハードワークを続ける傍ら、日本で初めてフライングダッチマン級に取り組み、弟の尚史さんとペアを組んで練習を重ね、1972年ミュンヘン五輪に日本代表選手として出場し、山村兄弟の名を世界に轟かせた。そのときレーザー開発者のイアン・ブルース氏（カナダ スター級代表）からレーザー級の日本での普及役を任されることになり、帰国後すぐにレーザー普及のためのクラス協会とボートビルダーのPSJ社とを立ち上げ、実務を担当する大谷たかを氏という無二のパートナーとともに普及活動を開始された。

当初は自ら西宮フリートの初代キャプテンになり、Tシャツ、短パン、ディンギーブーツというレーザーセイラー独特のスタイルでハーバーを闊歩して普及に務めたが、レーザーの普及が軌道に乗ってからはPSJ社のオーナーという立場とレーザーセーリング活動に一線を画しておられたため、若いレーザーセイラーは彼のことを知らない人が多い。

一方オフショアセーラーとしてクォータートン世界選手権、パンナムクリッパーカップ参戦、ワントンの「チャチャ号」を駆って長く国内・海外で活躍、体調を壊されてからはヨット活動も制約されがちになったが、最近はドラゴン協会の会長としてチューニングやレースを楽しんでおられた。

山村さんのヨット観を象徴するメッセージを紹介しましょう。

アテネを目指すセーラーへ<Sail Your Dreams.Vol.2(2002.3.)から>

『ヨットというものをレース・セーリングという狭い範囲だけで見ないで、海という自然を楽しむことの出来るスポーツだという考え方に立ってほしい。オリンピックでメダルだけを目指すのであれば、それを逃してしまうとセーリングへの興味はなくなり、つまり限界がすぐに来てしまいます。年齢的にも精神的にも長くセーリングと付き合うには海を楽しんでいるという気持ちになることです。そうすれば世界はもっと広がります。』

会長 木村 治愛

山村さんのFD時代のセーリングメイト、キース・ムストー氏（1964年東京江の島オリンピックFD級銀メダル）を招いて西宮で開催されたレーザーイベントの様相（1977年神戸新聞）写真は右から山村彰、Kムストー、何と左端は若き日の木村ジアイさん参加艇のセールナンバーは8000番代から2万番代のビカビカの新艇まで……。

（第3種郵便物認可）

神戸

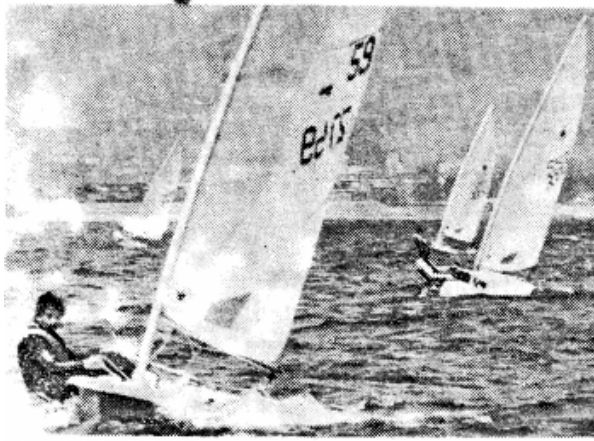


ムストー選手 世界一流の帆走

日英親善
ヨット

他艇を寄せつけず 20人の「挑戦」受けて

西宮沖



「しどろくなく精進した八日、日英親善のヨットレースが西宮沖で開かれた。関西のヨットマンたちが「本場の選手と争ひに」と案から神奈川県の若ノ島で行われたレースに西宮沖で

日中の世界的なヨット選手、英国人のキース・ムストーさん（右）を招いたもので、ムストーさんは初めてのコースながら見事に帆走ぶりを披露した。

ムストーさんはヨット経験二十六年に及ぶ英国の代表的な競艇選手。東京オリンピックではスライ

日本オリンピック強化の全にヨットのため、三日の翌日を、ローマ、ミュンヘン前オリピックに日本代表として出陣した関西ヨットクラブ会員、山村さん（右）西宮市千歳町五丁の年親友で、山村さんの招きで西宮を訪れたが「世界的な選手と一度でもいかに帆走してみたい」という関西ヨットマンの願いを快く受け入れ、特別参加になった。

この日開かれたのは一人、一枚帆の「レーザー級レース」。山村さんのヨットを借用したムストーさん（関西のヨットマン二十人が「挑戦」した。会場は西宮沖のコンディション。「初めてのコースなので、期待に添えるかどうか」と話していたが、スタートの合図と同時に帆走。長さ四・二メートルの帆を自由に操り、他艇を付けず、折り返し際でもフイにするように解やかに方向転換、世界の実力を見せつけた。

レースに参加したヨットマンたちは「さすがに世界一流の選手。勝負にはならなかったが、大いに勉強になりました」と話した。